

会議名	令和7年度 第1回台東区立図書館に関する意見交換会	開催日	令和7年9月24日(水)
		時間	午後6時30分～8時00分
		場所	生涯学習センター501コンピューター研修室
出席者	大串夏身委員長(昭和女子大学名誉教授) 野末俊比古副委員長(青山学院大学教授) 森真奈委員(公募区民) 足立祐子委員(台東区立富士幼稚園園長) 山藤弘子委員(台東区社会教育委員) 吉本由紀委員(台東区教育委員会生涯学習推進担当部長)		
配布資料	事前配布資料 【資料1】中央図書館のリニューアルについて 【別紙資料】図書館フロア図 当日配付資料 【資料2】台東区子供読書活動推進計画(第5期) 【資料3】台東区の図書館 令和6年度事業報告 委員からのご意見		
内容	1. 開会 配布資料の確認 2. 挨拶 大串夏身委員長 3. 新委員紹介 4. 議事 今後の図書館について ○「各年代が、切れ目なく図書館に来てもらうための事業等の仕掛けについて」事務局から説明 【委員長】 ただ今の事務局の説明について、ご意見・ご質問があればお願いしたい。 【委員】 計画内でのアンケートは、区内の小・中学校向けで、どこか受験をして、他に行っている子たちには聞いてないということか。 【事務局】 配付したのは、区立の小・中学校だが、インターネットで応募できるようにはしていた。 【委員】 区立小・中学校以外の方からの回答というのは、広報など積極的に載せてはいないのか。 【事務局】 図書館のホームページに載せた。 【委員】 ご自分がたまたまホームページを見てということか。 【事務局】 そのとおり。		

【委員】

私立中学校に通う子も多いので、これが全て、子供の実態かということはわかりかねるという感想がある。

【委員】

キーワードとしては利用者の主体性ということで、重点を置いた図書館づくりができるのではないかと、ここ地域で子育てをしてきて思った。

仕事柄、外国の方に日本語で関わったり、外国ルーツのお子さんと日本語を勉強する機会等あるが、この図書館がオープンしたときと比べると、現在、台東区の外国人住民の比率は約10%となっており、かなり増えた。

多言語・多文化での読み聞かせや、外国ルーツの住民だけではなく、日本の住民の方にも一緒に楽しんでもらう仕組みはどうか。

また、図書館に伺うと、こどもとよしつにたくさんの子供が来ているのを目にする。

より台東区の図書館を好きになり活用してもらうために、こういった小学生などに、図書館でのPOP作りや、図書館の仕事体験ができるような活動はどうかと思った。

中高生が離れていってしまうということも、子供を見ていて経験がある。

先ほどのアンケートの中でも、「読みたい本があまりない」という答えがあったが、実際に子供と借りに来たときもこの年代が借りたそうな本が、なかなか見当たらなかった経験もある。

そこで、中高生が同世代に向けた本を選んだり、同世代に向けた図書館での企画や運営に携わってもらうような仕組みを考えていた。

また、図書館が本だけの場所にならなくてもいいと思うので、幼少期から親子で居場所になるような、中学生にも繋がるような形の仕組みになるといい。

利用者をお客さんというふうにするだけではなく、運営やサービスの提供のところでも関われるような仕組みをぜひ入れていただけたらと思う。

【委員長】

今のご発言で、利用者の方が、積極的に図書館の運営などに関わる、中高生などが図書館の本も選ぶということを推奨しているが、個人的には、小学校で図書委員をやっていたときに、近くの流通倉庫に行き、自分が読みたい本やみんなに読んでもらいたい本を選んだことがある。

それをみんなで積み上げて、なぜそう思ったかなど、いろいろ検討したが、それはとても良い体験だった。

江戸川区では、読書科特区というものをやって、本を選ぶところまで住民と一緒にしている。

【委員】

切れ目ないというところで、スタートになるのが幼児期かと思うが、保護者の方が子供を連れて、読ませたい本を読み聞かせたり、子供が読んで欲しい本を選んだりという場があることは大変ありがたいと思っている。

特に今回、こどもとよしつの中のおはなしのへやの段差がなくなるということだが、これまで読み聞かせに参加するときにも、若干段差が高いと思っていた。

敷居が高い、本当にそういうイメージだったので、そこがフラットになり少し広くなるということで、ベビーカーの人たちが来て子供に読んであげられ、段差1つでもとても良いと思った。

前のレイアウトのときは通路が若干狭く、本を読んだり探している人がいると、ベビーカーが通りにくかったを感じていた。

私たちは子供を20人ぐらい連れて来るので、迷惑にならないよう静かに端っこに寄っていたが、もう少しゆとりがある空間だとよいと思っていたので、全体的に広くなるのは本当に良いのではないかと思っている。

また、中高生のアクティブラーニングができる場所というのが求められていると思うので、調べ学習や自主的に集まってやりたいときに、「中央図書館に行こうか」という感じで来られるといいと思う。

きっと素敵なおもいでができるのではないかと思うが、待ち合わせをするときに名前は重要なので、「あそこでね」というようなことが繰り広げられていくのが楽しみかなと思っている。

絵本の読み聞かせは、園では1日2・3冊しているので、年間で700冊くらいになっている。

習慣みたいなものが子供たちから保護者に伝わって、そこから小学校以降に繋がるといいと思っているので、園でも活用させていただけると思う。

【委員】

意見として思うことが2つあり、1つが、今回の調査結果を見て感じたことになる。
特に中高生の部分で、本を読まない、図書館に行かない、これが圧倒的多数なのはもう認めるべきことだと思う。
ただ行かない割にはこうなって欲しいという自由記述はたくさん書いてもらっていると思った。
なので、途切れないという目標に対して、入口も大切だが、切れるポイントや切れている間、本は読んでいない間でも来てもらう動機づくりをすることで、繋ぎとめておけると思う。
また仮に図書館として本を読んでもらうことを理想のゴールにするのだとしても、本を読んでない人でも楽しんでもらえる時間ということを念頭に作りつつ、また読みたくなくなったときに行きづらい場所ではなく、これまで行っていた場所からのスタートになることが大事なのではないかなと思った。

もう1つ思ったことが、リニューアルをした後、区民の方にどうお知らせするかという部分。
アンケートをされていたこともほとんどの人は知らず、図書館がリニューアルされることはギリギリ知っているぐらいだと思っている。
その中で、ペルソナを設けるようなことがいいのではないかなどと思う。
「こういう不便を感じていた」「これに対してこうできました」というような、共感できる形でお知らせできること、行ってみたいと思えるのかなと思った。

【副委員長】

先ほど委員から話があったが、大賛成である。
重ねてしゃべらなくてもいいのではないかと思うが、すべてに共通していると思うので、発言する。
まず、基本的には図書館、或いは行政が何かを提供するという考えはあってもいいが、それだけではなく、利用者が主体・主催、少なくとも共催ぐらいの感じになる、いわゆる利用者協働の考え方というのが大事だと思う。
どこにニーズがあって、どうしたらいいかがわかっているのは当事者なので、当事者が考え、自分たちで企画し、展開していくというところが基本としてあるかと思う。
このときにポイントがいくつかあり、1つは、主催側・共催側、或いは協働で主体として動くには責任が伴うので、何らかの肩書きなりが必要・有効であること。
ここに「キッズライブラリアン」とあるが、まさにこういうことである。
名刺に書けるような、この立場でやっていますといえることが大事。
それを裏付けるためには、研修のようなものは必要で、誰でもいいではなく、条件をつけ、セレクションもあっていい。

2つ目は、ゴールは図書館側で設定しておくべきで、切れ目なく図書館に来てもらう、親子で図書に親しむ、アクティブラーニングを活発に使う、ということはもちろん目標だが、もう一步進んで、どうあって欲しいか、何のために図書館に来て欲しいのか、来てもらってどうなって欲しいのか、本を大好きになって欲しいのか、居場所として居てもらえばいいのか、友達同士の交流が生まれればいいのかなどということが大切。

目標は複数あってよい。
さきほどペルソナという言葉があったが、こんなふうな姿になって欲しいということまで、一步先を見たところをゴールにして、そのためにやることは図書館が指定することが大事だ。
区立の施設なので、完全に自由というわけではないということである。

3つ目は、協働の相手は個人とは限らないということ。
個人でなくても、学校でも、団体でも、企業でもいい。
図書館では、どうしても個人のボランティアや友の会などのイメージがあるが、それだけではなく、団体や学校でも構わない。
大学のゼミ単位でフィールドが欲しいという人もいるし、企業であれば、中高生の声を聞いてビジネスに活かそうという人もいるかもしれない。
お互いにメリットがあるやり方というものがある。

4つ目は、その場でやる企画やイベントだけではなく、来られない人にも関わるようなやり方、例えばみんなで作ったものを展示して、その日に来られなかつた人もそれを見ることができるなども大事だということ。
例えば、子供たちが自分でテーマを決めて図書館から本を選び自分の棚を作つてみる、あるテーマの特集棚みたいなものを作つてみる。

そうすると、その場にいなくても後で使える。
つまり、時間差があっても、お互いに学び合い、教え合う、そういうものが生まれるような仕組みを重視したほうが

いいと思う。
さらに言うと、提供するのは人間だけでなく、お金や物でもいい。
例えば企業の人が、子供たちに本を楽しんでもらうためにかわいいクッションやぬいぐるみを提供するというのも協力の仕方だと思う。
また、場所の提供、会社見学、学校の図書室と連携して図書室でイベントをやるなど、人だけではなく、物・中身・教材・場所など、広く捉えていくというのが協働のときには大事かと思う。

少し話は逸れるが、近畿大学がアカデミックシアターという図書館っぽいものを作った。
そこには、産学連携、企業の研究室や展示室のようなものがバンバンできている。
学生側は、こんな企業があり、こんな製品を作っているだと、こんなボランティア団体がこんな活動をしているということを知って、お互いにメリットがあるということである。
成果物を展示するようなこともとても意味があると思う。

最後に1つの例としてだが、大学図書館では協働をだいぶやってきている。
学生協働という形で、学生を集めて、もちろん研修やセレクションもあるが、選書ツアーに行って選書してみたり、広報をやって図書館に来てねと学生同士で呼びかけてもらったり、イベントをやってみたり。
公共図書館でも当然できる。

何があればいいかということは、当事者が一番わかっている。
学生だけではなく、中・高生、子供、保護者、地域の人たちみんなで、そういうものを考えていくといいと思う。
利用者側がこういう仕掛けや運用に関わっていくようになると、具体的な中身というのは自然に決まってくるかと思う。

○「子供と保護者が図書に親しむための仕掛けについて」事務局から説明

【委員長】

ただ今の事務局の説明について、ご意見を伺いたい。
まず、事前にご意見をいただいた委員からお願ひしたい。

【委員】

おはなしのへやを多世代・多文化の交流が生まれるコミュニティースペースにということを提案させていただいた。
先ほど申し上げた部分と重なってくるが、親子でオリジナル絵本を作ったり、それを一定期間展示したり、居場所をこちらが提供するというよりも、自分たちでデザインするような形にしていったほうが、来るモチベーションにもなり、愛着も湧くと思う。
先ほど別の委員からもお話があった通り、本だけというのではなくて、子育てに関する情報や地域のイベントなど、そういうものもあることでぶらっと立ち寄り、本を借りていくという流れもできるかと思った。
もう1つは、多言語・多文化の絵本コーナーが、台東区にいる方の実態に合ってない絵本、そして大人向けの本になっていると感じる。
具体的には日本人が洋書に親しむなど、主語が日本人になっているので、これを多様な方たちを主語にした絵本または書籍を選ぶ良いと思う。
選ぶときも外国人住民と日本人住民が混ざって選ぶような仕組み。

また、以前、外国語のおはなしの会をやったときに印象的だったのが、若いお父さんお母さんがお子さんを連れ、その言語は知らなくても十分楽しんでいた。
その絵本を見ながら、音を真似してみたり、お子さんとお父さんが一緒に口ずさんだりしていたので、絵本で旅する世界一周のような形で、毎月特定の国や地域をテーマに、台東区ならではの多文化共生を象徴する体験スペースのような場所になるといいと思う。

先ほど話にあった通り、図書館のその先の描いたところは、多様性のあるまちづくりになっていくといいと思っている。
先月、神奈川のアースプラザに行き、図書館などを見せてもらったが、社会と繋がりがある場だった。
図書館がシーンとしていて神聖な雰囲気というよりも、例えば外国ルーツのお子さんが受験の情報を取れたり、高齢者の方が集まる談話サロンがどこに行けばわかるとか、そういうものも図書館の中に紛れ込んでいた。
地域社会と隔たりのないような作りになっていて、台東区もそういう場所になることが多世代、親から子供へ繋

がるかなと思った。

【委員】

今、幼稚園・小学校では、教育面で幼小のかけ橋期の教育の充実と言われているが、台東区の中央図書館と同じ建物に教育支援館があり、そちらで幼小の学びの芽を繋げるということで「小さな芽」という冊子を作り更新してきている。

その中に、幼児期に読みたい絵本が選ばれていて、どの幼稚園でも保育園でも小規模保育所でも、この本を読んだことがあり、小学校に入ったときに先生と子供同士の話題にできる。

図書館でもどこかに掲示されているか。

【事務局】

休館前は「小さな芽」の本を集めたコーナーがあった。

【委員】

それがそのまま継続するとか、すぐにわかるようになっていると良い。

区でやっている取り組みなので、この本はどこに行けばあるかと聞かれたときに、すぐに案内できれば、そこも接続していくのではないかと思った。

【委員】

私にも小さな子供がいて、比較的本が好きな家庭だが、親子だけで図書館を利用するときに、不便だなと感じることがいくつかある。

1つ目が、子供に読んでと頼まれたときに、親としては荷物も多く、トイレも遠い、喉も乾いていたら、そろそろ最後にしようと言いたくなる。

子供が読んでと言ってくれるときが、本当は時間をかけるべきときかと思うが、喉が乾く、腰が痛い、靴の着脱をしないといけないなど。

そういうストレスになるようなことをマイナスしていくと、子供と本を介して向き合う時間がおのずと長くなるかと思う。

また、返却ボックスも遠く、たくさんの本を入口のところまで持っていくのは重いとか、そういう利用シーンを考えたときの不便さのようなものを潰していくと、とても居心地がいいかなと考えてる。

もう1つが他の委員もおっしゃっていたが、何かのテーマの本があったほうが楽しめると思う。

数に興味を持ったとき、自然に興味を持ったときなど、発達の段階でそういったポイントがあると思うので、それに合わせた本など、タイムリーに借りてもらえるかと思う。

名作・海外の本・教養に繋がりそうな本、子供が興味を持つタイミングの本など、そういうテーマがあると非常に良いと思った。

【委員長】

私が図書館に勤めていたときは、図書館は字を読める子供たち以上を対象にサービスをするところという話があった。

それが1973年。

ところが23区に出向したときに、ヨーロッパにおける児童福祉の現状をいろいろ調べたが、ヨーロッパは情報社会で活躍できる人材をどうやって育てるのかということが非常に大きなテーマだった。

その時に、まず最初に地域では図書館が中心になり、小・中学校がそれに加わる。

地域の中では、まだ字がわからない、知らないという子供たちに静止画を見せながら語りかけるということが、人間の基礎をつくるときに非常に効果的で、それも親だけではなく、図書館という場で地域の人が、それぞれに語りかけることがいいと、図書館員・学校の先生・心理学者・医者とチームを作り、0歳児からの読書ということですつと働きかけをして、段階的なプログラムを作り始めていた。

残念ながら、日本では何十年と遅れていた。

そういうことで言えば、とにかく乳幼児の段階から図書館に親しんでいただく。

そういう場合、日本の図書館で少し欠けるのは、乳幼児をお世話するエリアがない。

私が関わった、板橋区立中央図書館では、乳幼児が使う公共施設にはそういうものが必要だという区の方針があり作っている。

そういう配慮も、図書館として視野に入れて考えていく必要があると思う。

また、これまでの話にあったように、お母さん方にアンケートをとると、それぞれの段階でどういった本を手にして子供たちに働きかけ、子供たち自身がどういうことに興味を持つかということを知りたいというものが多い。これは図書館だけが考えるには無理があるので、地域でいろいろな活動をされてる方々の協力を得る。それは乳幼児から小・中学校、高等学校だけではなく、大人の世界も同じ。

札幌市が図書情報館というものを作った。

そこでは、図書館員が地域の中に出でていき、福祉の関係者、経済の関係者、社会的な運動をされてる研究者、スポーツをされてる方々などに話を聞き、どういう本が今求められてるかということで本棚作りをした。

そういうふうに、単に子供だけではなく、大人まで、そういったことを視野に入れながら考えていただくといふと思う。

○「(仮称)アクティブラーニングルームの運用について」事務局から説明

【委員長】

ただ今の事務局の説明について、ご意見・ご質問があればお願いしたい。
まず、ご意見をいただいた委員からお願いしたい。

【委員】

10代が自ら学びを深められるよう、社会と繋がっていくということが大事かと思い、自分の街や将来を想像していく、学びのラボのようなものができるといふと思っている。

そこを中高生で活用してもらうと言っても、野放しで学びは難しいと思うので、そういったところに適切な図書館員や、地域や学校などの専門家をファシリテーターとして招くということは大事かと思う。

特にコロナをきっかけとして、動画を編集したり、プレゼンをしたりということを、今の子供たちは普通にやらなければならなくなつておる、学校の教室でやるだけではなく、こういったところでやれる環境を整えてもらえたらしいと思う。

例えば、動画編集、デザインのソフト、自分ではなかなか買えない3Dプリンターやゴーグルなど、これから投資として区でいくつか貸し出したり、ここに来れば使えるような仕組みにしてもらい、ただ作るだけではなく、作ったものをここで定期的に見てもらう。

例えば、6年ぐらい前に人権・多様性推進課と小・中学校ぐらいのお子さんと一緒に、台東区内に住んでる外国人住民のご家庭に訪問したり、モスクに訪問して、グローカルシネマというドキュメンタリー映画を作った。

そういった何かテーマを設定してみんなで学び合うというときに、できれば大学生や地域の専門家にメンターとして来てもらうといふと思う。

もう1つが、台東区愛を育むためにも、台東区の地域課題を解決するプロジェクトのようなものができるといふ。中高生がグループで、台東区が抱える問題、例えばオーバーツーリズムなどの観光客についてや、空き店舗・空き家問題、多様な人たちとの防災の意識をどのように高めていくかなど。

課題を探すところから勉強になると思うので、そういったことをこの部屋で行い、プロジェクトの成果を図書館で展示会やオンライン発表会をする。

また、一番は自分たちの学びが社会に還元されるという体験を作ってもらえたらしいと思うので、区の方へのプレゼンなど、社会課題や社会に繋がる学びをぜひここで提供していただけたらいいと思った。

【委員長】

今の話のような内容は、総合的な学習の時間、探究的な学習の時間など用意され取り組みにもなつていて、文部科学省の手引き書がある。

そういったことは、単に学校にとどめず、こういったところでできるといふ。

課題についても、学校では小学校4年のときに、地域づくりまちづくりのことを、いろいろなテーマで、安全安心・環境問題・福祉問題など、社会の時間を1年かけてやる。

中学になると、地理などで地域の課題を自分たちで見つけ、それを検討・発表して、地域の中や図書館などでも発表して住民の意識を高めて欲しいということになっている。

高校では、地域のソーシャルビジネスを作るとか、そういったところまでやっていて、それは総合的な時間の手引き書に具体例があり、地域の中で皆さんに協力して欲しいということが書いてある。

そういったことで考えるとこの部屋の使い方としては、非常にすばらしいと思う。

【副委員長】

主体的な学び、探究的な学び、協働的な学びが3つキーワードで、子供たちが学校でそれを今、一生懸命やっている。
主体的な学びがうまくいくポイントが幾つかあり、その中で図書館のような場所でやるときにポイントになることがある。
小学校の授業を思い出していただきたいが、教材・教具・教室・教師という4つの要素、資源がある。
教材は学ぶ内容で、いわゆるコト。
教具は道具、黒板・電子黒板、ノート・おはじきなどのモノ。
それから、教室は場所、ハコ。
そしてそれを支える先生・地域・先輩など、ヒト。
コト、モノ、ハコ、ヒトという4つの要素を連動的に組み合わせるといい学びになる。
図書館でこういうことをやるときに失敗しがちなのは、この場所を使って自由にどうぞとハコだけ使うとか、本を持ってきて、つまりコトだけ用意して良しにしてしまうということ。
手間はかかるが、ヒトが関わり、モノをうまく使って、図書館だと資料を何らかの形でうまく使って、そういう4つの要素を組み合わせると、良い主体的な学びになる。
図書館には四つの要素、資源が揃っている。

クリエイティブツールの話が出たのでお伝えしておくと、これは協力してくれるところがたくさんある。
3Dプリンターなら、うちの企業で提供しますとか、大学生が教えにいきますとか、たくさんいると思う。
うちの大学にも「青学つくまなラボ」という施設があり、3Dプリンター・UVプリンター・レーザーカッターなどが全部揃っているが、100%企業の寄付で運営している。
企業にもメリットがあり、そういう道具に親しんだ子供たちが将来自分のところに勤めてくれればいい。
良い人材が育つ手助けをしますということである。

大学生や高校生にもメリットがある。

小さい子供たちに教えていくということも自分の成長になるので、協力者はたくさんいる。

例えば読書や読み聞かせや作文コンクールなどにもその道の人達が絶対いる。

繰り返しになるが、協働という考え方がこれからの大肝かと思う。

図書館の職員でここにある新しいことを全部やることは無理なので、図書館は責任は持ち方向性は決めるが、あとはお任せしますというのがいいかと思う。

【委員】

質問になるが、現状のレイアウトでは、PC持ち込み席とアクティブラーニングルームとワークショッフルームが離れているが、防音や騒音などの配慮で分けているのか。

【事務局】

アクティブラーニングルーム・ワークショッフルームは、10代のお子さんに貸し出す限定の部屋にしようと考えている。

パソコン席は、一般の方が利用する席で、特に騒音対策で分けているということではない。

【委員】

アクティブラーニングルームとワークショッフルームに対して、年齢制限を設けないほうが良いのではないかと思っている。

理由としては、社会との繋がりがとてもいいポイントだと思うが、学生が行うプレゼンテーションを大人が見て刺激を受けることもあれば、大人がビジネスの場でどういう戦略を立てプレゼンテーションするかという姿を見て、この学びが実用的なのだと刺激されることもあると思う。

また、主婦の方でも、UIデザイナーなどをやっている方などは職場として使えたり、年齢を制限しないことのほうが、より刺激を受け合って、利用者が定着するような気がした。

PC持ち込み席をときどき利用しているが、今は放っておいても人が来ている状態なので、むしろその人達が入れるようにしたほうが、閑散としないのではないかと思うので、ここは検討いただいたほうがいいと思っている。

【委員】

区民としては、リニューアル＝姉妹都市の木材使用ということだけに目がいってしまいそうだが、ここに予算や人力を使うよりも、先ほどのサービスをやるとなったら、そこに予算を取って人を置くとか、ソフト面で研修をしなけ

ればならないと思うので、できればそちらにかけるような形のほうが、長く楽しく使えるかと思う。一見綺麗になつたら満足するかもしれないが、それでは前とそれほど変わらない気がするので、やはり中身のところでぜひお金をかけていただきたい。

【委員長】

いろいろご意見が出たが、それを咀嚼して検討し、リニューアルの内容をさらに高めていただきたいと思う。例えば、住民の方にどのように理解いただくかということも大切。杉並区はこういう部屋を作つてNHKに話を持ち込み番組作った。昭島市民図書館もNHKとタイアップして、建物の1階オープンスペースでの発表会や、図書館のレファレンスのことを紹介するというようなことを番組で2回ほどやっていた。そういうメディアを上手に使うということも将来的に考えて取り組んでいただくと、住民の方々の理解も広まっていいのではないかと思う。

【委員】

先ほど委員から、木材使用に関しての話があつたが、脱炭素成長型経済構造への円滑な移行の推進に関する法律の改正により、区全体で公共施設の大規模改修や、新たに作る場合には、積極的に木材を導入するという方針がある。

また、方針に基づいて使用する場合は、姉妹友好都市のものを使うという区の方針に則つて実施している。

ただし、図書館の運営として必要な人を予算要求し交渉している。

それが実現するようにやっていきたいと思っている。

【事務局】

先ほど委員からアクティブラーニングルームについて、年齢を制限しないほうがいいのではないかというご意見をいただいたが、私どもとして読書離れが進む中・高生世代に図書館を使ってもらい、居心地のいい場所にしたいということで、年齢を10代にして話を進めている。

ただし、使い方によってはそういう関わりが持てるような事業展開が運用面でできるかもしれないと思った。いただいた意見を検討させていただきたいと思う。

もう1点、年齢に合つたおすすめ本のリストについてご意見が出たと思うが、この計画の中でも位置付けており、年齢に合わせた本のリストを作り、学校やホームページを通して、皆さんにお配りしている。これからもますます皆さんに知つていただけるよう周知していきたいと思う。

【委員長】

以上で議事を終了とする。

5. 閉会